

動車だのが来るので、近所合璧の者は目を丸して、表から覗かふとするものさへあつた。

「お迎ひに参りました、後藤様も丁度お出掛になつた所でござりまする。」

「さうか、それは御苦勞ぢやつた。」と、義興は忙しげに「吉野、支度は好いのか？」

「はい、只今。」

氣の進まなかつた吉野は、別に支度はしてゐなかつた、久四郎が来たので、やつと流元で顔を洗ひ、嫌やくながら白い物も附けるのであつた。

「早くせんか。」と、義興は待ち遠しさうに言ふ。

「イヤ御前様、成可く念入にお支度をなすつた方がへへへへ。」

「私もこれぢや不可のう。」

「お父上様のも其所へ出してございますわ。」

吉野は流元から言つた。

「ウムこれか」と、以前常着にしてゐた米流の袷に着更へた、吉野が丹精に仕立直して置いたので、今着て見れば立派なものであつた。

吉野も漸やく化粧を済ませて、着物を二階へ抱へて行き、手早やく大島の袷に着更へるのであつた、木綿着の見贏しい風采をしてさへ、人目を曳く綺縹だから、化粧して着物を更へた風情は、花よりもまだ美しかつた。

「イヤー立派に出来ましてござりまするな。」と、久四郎は見惚れるやうに言つた。

「出来たら、早く行う。」

と、裏表の戸締りをして三人は終に自動車の人となつた、近所の人は遠くから自動車を噴めて、小聲で噂をしてゐるやうである、以前のまゝの身分なら、敢て自動車に乗る位は何でもないのだが、一旦零落して見ると、如何やら悪い氣持はせぬのである、お負けに義興の胸中には、事業に對する光明が輝いてゐるのだから、天にも昇る心地である、それに反して、自動車の進むに連れ、吉野の胸中には暗い悲みが湧き出して、ともしては涙にならうとするのである。

自動車は、矢を射る如く風を切つて進んだ、切通から廣小路に出で、花も見頃の公園の、やがて西洋軒の玄關先へ停つた。

久四郎は眞先き下車で、二人の出るのを待つて、萬事に眼を配りながら、玄關からずつと這入つた、ボーイはそれと見て、町重に挨拶して借り切つた室へ案内するのであつた。

「後藤さんは何所へ行かれたな？」と、久四郎は室をグルリと見廻すやうにして訊いた。

「はい、あの只今玉突場へ行つて入つしやいます。」と、給仕は頭を低く「すぐお呼び申しますから……萬望。」と、三人に椅子を進めて出て行つた。

「さあ、お嬢様。」と、久四郎は沈み切つてゐる吉野に言ふ。
「はい。」

「掛けるく。」と、義興は睨むやうにして口を添へた。

吉野は返事もせず、纒かに會釋したが針の蕊へでも腰を卸したやう、斯うして振り切らうにも振り切る事の出来ない羈絆に引摺られて、一步々々奈落の底へでも引込まれるやうな思ひをしてゐた。

暫らくすると、スリバの琵琶の琵琶音が忙しく這入つた來た、肥満した體格に、大鳥お召の袴を着て、セルの袴を裾長に穿き、七々子の五ツ紋を羽織てゐる緒顔の眼の嫌やに鋭い男が、義興と初對面の挨拶してゐるのを、吉野はチラと見て驚

いた、思はず身體がワナ／＼と顛へ出した。

「貴嬢が吉野さんでしたか、好く來て下さいましたねへ。」後藤は吉野の手を取らんばかりにした。

「は、初めまして……。」と、吉野はヂリ／＼と後方へ寄りながら、顛え聲で言つたが、椅子の足へでも糞まつたのか、但しはヒステリー症に罹つてゐた勢かヨロ／＼としてばつたり仆れた。

(二十四)

後藤は「アッ！」と驚いた、義興も久四郎も共に驚いて駆け寄つた。

「お嬢様、確乎なさいませ。」と、久四郎は眞青になつてゐる。

「吉野、何と言ふぞまだ。」と、義興は眞赤になつた。

「吾妻君、君濟まんが醫者を呼んでくれ。」

驚いてゐた後藤が、慌て、慙ふ言つた。

「承知いたしました。」

「イエ、夫れには及びません。」と、吉野は一生懸命に、怖へく言つた、慎重深い性質だけに、人前を耻たので氣が張り詰めてゐたが、自分では殆んど夢中で言つたのである。

「大丈夫でござりまするか。」

「失禮をいたしましたして、御免下さいませ……。」

吉野は蹠跟と立ち上つて、椅子を執固と力にした、然し、詐りがたい顔色は恐ろしい程青かつた、眼の色も如何やら變つてゐる。

「無理をしちや不可んです、醫者に見てもらつたら如何ですな。」

「イエ、エ、最う大丈夫でござりますわ。」

「ねへ姉川さん。」と、後藤は一人氣遣ふた。

「何、それには及ばんでせう。」

義興は苦澁きつてゐる。

「では、時々斯ういふ事があるのですか。」

「今まで恁麼粗々つかしい眞似をした例はないが、椅子でも邪魔になつたのぢらやう、然うぢやらう吉野。」

「はい、失禮をいたしましたして、何とも申譯がございません。」と、吉野は喘ぐやうにして言つた、目には涙が漲り、唇まで色が變つてゐる。

「それでは別室で、暫らく休んだら如何でせう。」

「はい、イ、エ。」

「気分が悪ければ、遠慮せんと休め。」

「……妾、今日は、お暇を頂いて歸へして頂きたいのですけれど……。」

「馬鹿、貴様の爲めには、終生の最も大切な日だぞ、馬鹿な。」

「はい。」吉野の目からは涙が溢れた。

「イヤ姉川さん、お叱り下さいますな、話は最う就いてゐるので、私の方に否やはありません、お気分が悪いのなら、却つて宅へ歸ると好くなるかも知れません。」

「でも、折角来て、濟まんぢねへ。」

「イエ決して……吾妻君、君濟まんが吉野さんを送つて来てくれ、そして三人で鑛山の打ち合せをせうぢやないか、ねへ姉川さん。」

「然うかね、それぢや久四郎、連れて歸へてくれ。」

「承知いたしました。」と、久四郎は吉野の手を取つて、給仕と二人掛りで自動

車まで連れて行つた、吉野は幾等か気が緩んだと見へて、最う顔乎としてゐるのである、何所を如何駛つたのか、夢心地で我家の表へ着いた。

「まだお気分が悪うございますか。」と、久四郎は眉を擡めて顔色を窺つた、其言葉に気が付いて、吉野は我家を見て吻とした。

「エ、イ、エ、大丈夫ですわ。」と、我を張つて、手も取られずに下り立つた、そして、帯の間から鍵を出して、錠前を外さうとしたが、目が眩んでゐるやうで錠穴へ甘く嵌らなかつた。

「ドレ〜、私が開けませう。」

久四郎は鍵を受取つて開けた、吉野はそれを待ち兼ねて、座敷へ上つて吻と

した、汚くるしくも我家と思へば居心地が好かつた。

「如何でございます。」

「大丈夫ですわ、まあ妾、先刻は如何してあゝでしたらう、随分失禮でしたわねへ。」と、努めて平氣を装ふのであつた。

「最う、御気分は悪ふござりませぬか、何ならお醫者でも……、」

「イ、エ、夫れには及びませぬ、歸りましたら、大層快くなりましたわ、御心配をかけて濟みませんでしたわねへ、貴君は萬望これでお歸りなすつて下さいませ、もう大丈夫でございますから……、」

「左様でございますか、でもまあ。」

「イ、エ、本統に大丈夫でございますわ。」と、吉野は早く久四郎を歸らせて、獨りでシミ／＼泣いて見たかつたのである、其所へ義夫が大谷と共に歸つて來た、吉野は「先生お上りなさい。」と、いふ聲を聞くと同時に、土曜日であつた事を思ひ、大谷の聲を聞いて異様に胸を轟かした、自分の力では如何にもならない所へ急に力強い手蔓を得たやうに思つた。

「本統に、弟も歸りましたから。」と、吉野は追ひ立てるやうに言つた。

「只今。」と、お辭儀をした下から「お姉上様、何所へか行くんですか。」と、心配さうに訊いた、珍らしく姉が着飾つてゐるのと、昨夜の結婚談を思ひ合せたのである。

大谷も這入つて見て驚いた「お出掛けなんですか。」と、聞きはに躊躇して立つた。

「イ、エ、今歸りましたのですわ、萬望此方へ。」と、吉野は心ばかり顔に血の氣を見せて、座布團を進めるのである。

「お客様ですわね。」

「エ、イエ。」と、吉野は曖昧に言ふ。

「イヤ、私は最う行かなきやならんのですから。」と、久四郎は武骨一遍の大谷の顔を染々見て「失禮ですが、貴郎は誰何ですか。」

「僕は久四郎幸藏といふ者です。」

「はあ。」と、猶ほも不審さうに、吉野の説明でも待つやうに顔を見た。

「ねへ、僕の学校の先生ですよ。」と、義夫が言った。

「あゝ左様でござりますか、では私はこれでお暇にいたします……お嬢様のお加減が、少しお悪いやうでござりますから、萬望お願い申します……お嬢様お大切に……。」と、久四郎は出て行つた。

「成程、今日は顔色が馬鹿に悪いですねへ、如何かしたのですか？」

吉野は只だ俯首いて、膝に涙を落した。

「お姉様、如何したのですか。」

「僕は義夫さんから聞いたのですが、貴嬢は後藤碩平と結婚なさるんださうで

すねへ。」

「はい。」

「彼奴と結婚なさるのは好くないですねへ、以前横領罪で喰ひ込んだ前科者ですぞ、殊に金のあるに任せて、妙齡の婦女を弄ぶ怪しからん奴です。」

「エ、ツ。」と、吉野は色を失つて涙の顔を上げた。

(二十五)

義夫は如何なる事かと二人を見較べてゐる、一旦上げた吉野の顔は、萎むやうに段々頂垂れて、涙が臉を溢れるのであつた。

「最う全部定めて了つたのですか。」と、大谷は稍や失望的に言つた。
 「お父上様はお定めなすつたやうでございますわ。」

「それや酷いですねへ、貴嬢の意志を充分に確めないで。」と苦情を持ち込むやうに言ふ「義郎君でもゐたら大いに反對されたでせうがねへ、能く奴の一身上に就いては知つてゐる筈ですから、彼のために、非常に苦味い経験を舐めた同窓の友があるのですからねへ。」

「まあ……、」

「貴嬢はお父上様に反對しなかつたのですか。」

「妾、何事もお父様にお任せしてゐるのですけれど……、」

「餘り從順だから不可ん、餘り自己といふものを没して了つてるから不可ん、結婚なぞと言ふものは、一生の大禮ですから、一生の運命が定まるのですから最少し自己に忠實でなくちや不可んですねへ。」

「大谷さん、妾、如何したら好いのでせうねへ。」

「然うですねへ、お父上は金に飢えてゐらつしやるから、今反對した所が却々聞き入れないでせうねへ。」と、大谷は今更のやうに考へ込んで「まあ、逃げるより手段はありますまいねへ、暫らく身を隠すんですねへ。」

「それで、不孝にはなりますまいか。」

「不孝……と言はれると一寸困つたですねへ、不孝であるまいとすれば、勢ひ

犠牲になる外はありません、然し假令犠牲になつたとしても、お父上の事業が必ず成功するとは言へませんが、寧ろ十中の八九までは失敗でせう、その失敗の犠牲になるのは詰らんぢやありませんか、馬鹿々々しいぢやありませんか、貴嬢の孝心も、優しい性質も僕は好く知つて居ます、實に同情に堪へんです、實は今まで誰にも秘して居ましたが、僕は義郎君に後事を呉々もと頼まれて居るので、斯ういふ立ち入つた事も言ふのですが……、と、熱心を面に現はして「この際貴嬢は一時姿を隠した方が好いですねへ、その内には義郎君も歸るでせう、此頃は滿洲の撫順にゐるのですが、何でも渡滿する早々、鑛山主を訪ねて、國元の事狀を語つて、給料は要ないから、鑛山に對する研究をさせてくれ

と頼み込んださうですが、非常に其心掛けに感心して、随分重く用ひられてゐるさうです、そして、お父上のやつた鑛山を、一度調べて見て資金位は出して

も好いと言つたさうで、非常に喜んで手紙を寄來しましたよ。」

「まあ、さうでしたか、色々とお世話になりました……、」と吉野は無量の感謝を含めて言つた。

「今暫らくですがねへ、一度嫁したら取り返しが付きませんがねへ。」

「お父上様は、あの通りの氣質でございますから、妾、最う決心するより外に……。」

「決心と有仰ると？」

「大谷さん……、」と、吉野は流れる涙に堰れて後は出なかつた。

「如何すると言ふのですか。」

「妾、行く……行くより外に仕様がありませんね……。」と、怵へかねて泣き伏した。

ところへ自動車が一臺表で停つた、若し……やと思つてゐると、手荒に格子を開けて、義興が久四郎を連れて這入つて來た。

「あ、お父上様だ。」と、義夫は恐しい者でも來たやうに言ふ。

吉野と大谷は、佳成り酒が巡つてゐる義興の顔を見ると、殆んど同時に「お歸りなさい。」と頭を屈めた。

「貴様は、また何をしに來たのぢや。」と、大谷の顔を見るや否や吐鳴つた「か歸れ〜。」と以ての外の憤りである、久四郎から聞き知つて、少し早めに歸つて來たらしい。

「僕が來ちや不可んと言ふんですか。」と、流石の大谷も少し怫氣とした。

「お父上様……其麼失禮な事を……。」と、吉野は慌て、遮ざるやうに言つた。

「エ、黙れ……早く歸らんか。」

「歸るです……恩感の子を賣らんとする、金の飢鬼となつた者と、座を同じふするの汚ららしい、だが、最後に御忠告して置きますが、如何なる猛獸と雖も、我子は決して食ひませぬぞ、如何に飢えても食ひませぬぞ。」

「餘計な事を言ふな。」

「は、は止むを得んですねへ。」と、大谷は憤然として、義興と久四郎を尻目
にかけながら歸つた。吉野は手の下しやうもなく、途方に暮れて見送つてゐた
が、堪りかねて義夫を先きに急いで入口へ行つた。

「大谷さん、萬望悪しからず……。」

「令嬢！ 僕は、貴嬢がお氣の毒に堪へんですよ。」

「はい……。」と、吉野は慌て、袂を顔に押し當てた。

「然し、何事も運命です、たゞ怨むらくは貴嬢は、何故此麼優しい柔順な女に
生れたのでせう。」

「大谷さん！」と、吉野は我を忘れたやうに、大谷の二の腕に縋り付いた「お
兄上様や、義夫さんの事を、お、お願いいたします。」

「それは無論です、其處ことまで心配しちや不可ませんよ。」

「吉野！ 吉野！」と、痛走つた聲で義興が呼んだ。

(二十六)

早速後藤頌平は久四郎の手を経て多分の結納を取り交した、今日まで餓虎の
やうに金に焦れてゐた義興の懷中には、手の切れるやうな紙幣の束が迂鳴つて
ゐる、俄かに汚れてゐた髻に手入をするやら、何彼が急に一變して、心までが

綽然と希望に耀いてゐるやうである。

一方久四郎は姉川家と後藤家を、日には何度となく往復して、頭ばかりペコ／＼下げてゐる、大分腹を肥したらうと、知る人があれば思ふであらう、妻のお松まで引張り出して、吉野の嫁入支度を手傳ふといふ騒ぎ、人目を惹く三越や白木屋の自轉車が、毎日のやうに来るのである。

斯う言つた調子で、一日々々と吉野の嫁入支度は出来た、幾重かの立派な着物、木の香の新らしい總桐の箆筒、萬事萬端何不足のない支度である、永い間話し聲も滅多になかつた姉川家が、俄かに此の有様であるから、さてはと言はぬばかりに、お金があるから彼等に吝しい暮しをしてゐたのだとか、娘のお

尻のお蔭だとかいふ噂が吉野の耳にも這入つた位。

黄道吉日が近付くほど、吉野の顔色は冴えなかつた、然し、今は涙を見せるへ氣を兼ねる身の上である、彼女は更けゆく夜を毎夜のやうに人知れず夜着の襟を濡らした。

義夫も姉の心を察してゐるのか、支度が着々連んで行くのを観て、心細さうな顔をしてゐた、そして稀に人目のない所で、

「お姉上様は、如何してもお嫁に行くんですか、僕は嫌やだア。」と、泣き出しさうな顔で言ひ／＼した。

「義夫さんは、好く勉強して、お兄上様のお歸りなさるのを待つておゐでなさ

いよ、ね、何事も大谷さんに御相談してねへ。」
「えい。」

「お父上様は事業をなさると、義夫さんの事なぞ、お關ひなさらないかも知れないからねへ、そして、姉様がお嫁に行つたら、大谷さんに……。」と、吉野は俄に口を噤んだ。

「大谷さんに、如何するんです。」

「大谷さんにねへ……。」

「如何するんですか？」

「好いわ、好いわ……。」と、吉野は太い溜息を吐いた。

義夫は不思議さうに顔を瞠めて「言はなくつても好いのですか。」

「言はない方が好いわ、妾は、此儘、清い〜心を持つて、清い〜所へ住みたいわ、清い〜所へ行きたいわ。」と、堅くなつて涙を流すのである、義夫は益々目を丸くした、さう深くは姉の心を酌み兼ねて、言ふべき言葉がなかつたのである。

「吉野、吉野。」と、義興が大聲で呼ぶ。

「お嬢様、お嬢様。」と、お松の聲がした、吉野が慌て、涙を拭きながら、座敷へ行くと三越で仕上げた着物が、また一重来てゐた。

「何をしてるんぢや、日が迫つてゐるのに——さあ、又出来て来たから好く調

べて見なさい。」

「はい。」と、吉野は氣懈さうに、行き丈けの寸法を量つて見た。

手ぬかりのないやうにと、お松も注意深く寸法を覗きながら「確然と能く合つてゐますことねへ：裻下は、如何でございませうお嬢様？」

「大低合つてゐますわ。」

「さうでございますか、でも念の爲に。」と五月蠅く注意する、で仕方なく吉野が差して見せると「あ、合つて居りますねへ、仕立も好し柄も好し、お嬢様がお召遊ばしたら、嘸ぞ似合ふ事でございませう、一寸袖を通して御覽なさいました。」

「好いんですわ、着て見なくつとも——。」

「左様でございますか、でも貴嬢一寸……什麼にお似合なさるか、私にも見せて下さいましたな、ねへ御前様。」

「さうぢや、吉野、着て見るが好いぞ。」

「だつて妾、好いんですわ。」

「まあ然う有仰らずと、見せて下さいましたな、お嬢様がお召遊ばしたら、一層着物が引き立ちますわ、屹度。」

吉野は黙つて、常着の上に羽織つて見せた、只だ袖を通しただけで、裾をゾロリと引摺つたまゝ、襟を摘んで後方を振り向いた。

「似合ひましたか？」

「似合ひましたとも、好い柄でございますことねへ。」と、お松は膝で吉野の周圍を廻りながら、襟を吊らせ裾を揃へさせ、ためつ眇めつして獨りで夜めそやすのであつた。

斯うして、愈々吉野が興入すべき、黄道吉日は近付いたのである。

(二十七)

大谷幸藏は、毎日のやうに義夫から姉川家の様子を聞いて、吉野の身の上を氣遣つた、如何に金のためとは言ひながら、親のためとは言ひながら、清淨無

垢の、而かも人普勝れて優しい吉野を、狼のやうな爺に、見すく弄ばすのかと思へば、實に堪へがたい苦痛であつた——吳々もと義郎に後事を托されてはゐても、彼の地位として、然う立ち入つた事を言ふ事は出来ない、且つ又、吉野の孝心を却けて、無理に逃げよといふことま出来ない、出来ないだけ、吉野が不愠しくもあり、氣の毒でもあり、可愛想でもあり、親友に對する責任を思ふて、非常な苦痛に悶へるのであつた。

「あゝ、忌々しい親父だなア。」

彼は一人で、好く斯う呟いた、然し、その苦悶の甲斐もなく、花の如き吉野が、後藤願平の毒牙にかゝるべき、結婚の當日は來たのである。

彼は學校が退けると、飛ぶやうに下宿屋へ歸つて來た、そして帽子を取ると直ぐお神さんに、誰か尋ねて來た者はないと訊いて見た。

「イ、エ、誰アれも……。」と云はれて彼は氣の毒な程失望して頻りと考へ込んて了つた、大谷の斯うした態度は、永らく交際つたお神さんでも見た事がない位だから、よく／＼の事であつたに違ひない。

「今頃までに來ないぢや、最う駄目だ。」と、自分の部屋へ歸へるが否や、帽子を敲き付けて呟いた「今宵花は散るんだ、無慘に花は散らされるんだ。」と、彼は吉野の身の上を思ふと、立つても居てもゐられなかつた。

「チヨッ！、骨肉の愛はないのか、馬鹿！」と、彼は一人で氣でも狂つたかの

やうに呟やくのであつた。

彼は苦悶に堪へかねて、頭を抱へながら轉倒へつた、けれど苦悶は決して消えないのである、花が散る、花が散る、彼の胸には無慘な光景が描き出された「エ、酒でも飲んでやれ。」と、飛び起きて椽頬へ出た「オイお神さん、酒を一升ばかり持つて來てくれ。」

「お酒をですか。」と、お神さんは不審さうに言つた。

「ア、酒だ。」

「一升なんて……ありませんよ、壘詰なら有りますけれど。」

「壘詰で好いさ、五六本持つて來てくれ。」

「まあ。」と、お神さんは呆れて、間もなく妙な顔をして持つて来た。「如何かなすつたのですか、急にお酒なんて随分妙ぢやありませんか。」

「酒でも呑まなきややりきれんのだ、今夜は酔つてく、酔ひ潰れて明かしたいんだ。」と、大谷に壇の口を明けて、ガブ／＼喇叭をきめ込んだ。

「まあ、如何なすつたの、此所にお盃があるぢやありませんか。」と、お神さんは呆れ返つた。

「其塵小ぼけな物ぢや駄目だ、酒を呑むなら宜しく斯ういふ風に飲むべしだ。」

「だつて毒ぢやありませんか。」

「莫迦を言つてる、斯ういふ時には酒が大妙薬だ、神仙の靈薬も何のものかは

あゝ好い氣持だ。」

「如何かなすつてゐらつしやるのねへ、お肴もなしで……無理酒は毒ですよ、大谷さん。」

「好いつて事さ……。」と、大谷はガブ／＼水でも呑むやうに呷つてゐた。

すると「姉さんく。」と、階下からお神さんの妹が呼んだ。「大谷さんにお客様ですよ。」

「あいよ……大谷さん、お客様ですつて……。」

「お客様だ？誰か一寸見てくれ。」

お神さんは黙つて、障子の外へ出た、すると、洋服を着た立派な青年紳士と

五十格好の如何にも體格のガツシリした紳士とが、ツカ／＼上つて來るのである、入來しやいませ。」と、お神さんは頭を屈めた。

(二十八)

大谷は壇を片手に攫んだまゝ、お客だと言ふのに動きもしない、お神さんが片付けやうとした甲斐もなく、敷き散らした部屋へ二人の客は這入つて來た。

「大谷君！」

「オ、姉川か」と、一目見て大谷は打ち驚いた、今の今まで待ち焦れてゐた、姉川義郎が歸つて來たのである。「好く歸つてくれた、俺りや最う歸つて來ない

かと思つて、實は今自暴酒を呑んでゐたんだ。

「遅くなつて濟まなかつた、最少し早くとは思つたんだが、相變らず世の中は思ふやうに行かぬのでねへ。」と、義郎は腰を卸し、連れの紳士を上座に就けて「早速だが君、此方が森猛熊といふ僕の主人だ。」

「あゝ然うか、種々姉川君が厄介になつて、濟まんでしたねへ。僕は、大谷幸藏といふ者です、萬望宜しく。」

「然うかね、種々姉川から聞いて、君の友誼に感心しとる、まあ心配せんが宜しい。」

「僕は君、この森さんには一方ならん御厄介になつたよ、君が吉野の事を電報

で知らせてくれたけれど、今僕が歸つた所で、如何する事も出来ないだらう、と言つて、知らぬ顔もしてゐられんし、非常に煩悶してねへ、仕方がないから森さんに一切打ち明けて御相談したんだ、すると森さんが有仰るには、自分も近々に一度歸朝したいと思つてゐた所だから、では一緒に歸つて一臂の力を貸してやらう、又銅鑛の方も好く調べて資金を出しても好いと言つて下すつたものだから、歸朝したやうな譯でね。」

「さうか、そいつは好かつた、俺りや最う速も歸つては來ないと思つて、この通りさ、酒で今夜だけでも死んでゐたいと思つたんだ。」

「有難う、實に感謝の言葉もない。」

「全く、彼の前科者の爺に、吉野さんの一生を踏み躪らしたくないと思つたからさ。」

「有難う。」

「ちや一刻も早く乗り込んで行かうぢやないか、愚圖々々してゐちや令妹の危険が刻々と迫る、早く安心させてやらんと、什麼間違が出来るかも知れない。」

「最う後藤へ行つてるのか。」

「行つてるだらう、今日が當日だ。」

「さうか、ちや一緒に行つて呉れ給へ。」

「無論さ。」と、大谷は最う酒などには目もくれず、例の古帽子を冠つて追ひ出

すやうに「行う〜。」と急ぎ立てる。

「オヤ、お出掛ですの？」と。お茶を瀧れて来たお神さんは驚いたやうに言つた。

「あゝ。」と、其ま、階下へ下りて、横町の俵を頼んで車上の人となつた、そして間もなく後藤の女關へ乗り着けて、義郎は父の義興に面會を求めた。

けれど、義興は逢ふ必要はないと剣もほろゝの挨拶である、今姉川家の一行が着いたばかりだと見へて、後藤家は上を下へと混雑してゐた。

「ウム、如何せそれ位な事は言ふだらう、好し、令妹に逢ひ給へ、君は親身の兄ぢやないか、逢はないといふ法はない。」と、大谷は佛氣になつて「列席する

資格があるのだから、上つた方が宜い。」と、自から先きに立つて上つた、奥の座敷には大部客があると見へて、多くの人聲がした「吉野々々。」と呼ぶ義興の痛高い聲もする。

何事か起つたのかと、思ひながら大谷や義郎が客座敷へ行かんとすると、右手の座敷の衝立の蔭に裾模様の裾が見へた。

「お免し下さいませ。」と、微かながら力の這入つた吉野の聲である、大谷は秘と窺ひ寄つて、大に驚いた、白鞘の短剣を今や我が咽喉へ突き刺さんとする間一髪。

「危い〜」

「オ、貴郎は……、吉野はよゝとばかりに泣き伏した。

「お兄上様が歸りましたぞ。」

「エ、ツ。」

「姉川君。」

「オ、吉野……、」

「お兄上様。」

「最う心配するな、什麼ことがあつても、お前は後藤などの妻にはさせない。」
誰が知らせたのか、其所へ義興も久四郎も出て来た。

「不孝者、何故来た、貴様は子でもなければ親でもない、歸れ……。」義興は

吐鳴つた。

「お父上様、無断で家出して誠に申譯がございません、萬望お許し下さい、そして、吉野の此縁談だけは破談にして下さい、父上は御承知ないか知りませんが、後藤は前科者ですぞ。」

「前科者だ。」

「御前様、永らく御無汰沙いたしました。」と今まで黙つてゐた森猛熊が一足進み出て頭を屈めた、義郎も大谷も、此不審の言葉に驚いて、思はず顔を見合せるのであつた。

「貴様は誰ぢや。」

「私で……森猛熊でございます。」

「森？……ウム森か。」

「お解りになりましたか、今より二十年前、姉川家の玄關番をしてゐた森でございます、其後滿洲へ参りまして、鑛山に手を出し、今では可成り成功して居りますが、昨年計らずも若様が私の鑛山事務所へお出でになりました、色々様子を聞いて始めて夫れと知つたのでございます、如何やら貴君も鑛山で御失敗になつたさうでございますが、以前の御恩報じに、是非とも一臂の力を添へさせて頂きたいのでございます。」

「然うか、貴様が資金を出さうと言ふのか。」

「はい、十萬が二十萬でも、屹度出費いたします。」

「フム偉いな、玄關番のお前が、然うまで成功して居やうとは知らなかつた、

苦しみの餘りに、只た一人の娘を、私や犠牲にせうとしてゐたんだ。」と、流石

頑固の義興も、運命の數奇には勝つ事が出来なかつた「吉野、許してくれ。」

「お父上様……。」

「私が悪かつたのぢや、許してくれ。」

義郎は眼を潤ませて父を見てゐたが「大谷君、僕は衷心から君の友情に感謝する。」

「莫迦を言ひ給へ、何事も運命ぢや、うき世のうき世たる所以さ。」

今まで闇い谷底を歩いてゐたやうな人々の心に、始めて美しい春の日は輝いて、永い苦悶の夢は覺めたのである。

うき世終

大正七年一月四日印刷
大正七年一月廿日發行

—うきよ奥附—

—著者頰冠者—

印刷者 新井由藏
京橋區木挽町二丁目十三番地

發行者 服部喜太郎
東京市京橋區本村木町三丁目廿番地

發行所 求光閣書店
東京市京橋區本村木町三丁目廿番地
電話 東京二二二九番
郵政 東京一六〇九番

不許複製
定價廿五錢

悲劇文庫

春の歌

□作の心會園星野天□

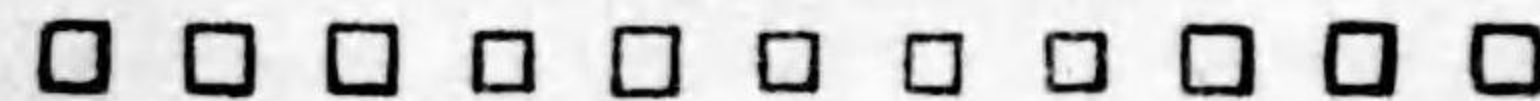
妖艶極まりなき新らしき女の色彩濃き生涯を見ずや？

若々しい鶯の音が梅の梢を傳ふ様に春を知り初めた若い女は希望と光明と理想と憧憬に張り切つて居る。青春の血潮の狂ふまゝに歡樂に酔ふた女優多摩子は、問題に問題を感じ起して終に自から其の渦中に苦しむ。彼女の問題に良人の愛を奮はれた若い妻や、驕弄せられし有爲の青年の懊惱は如何ばかりぞや？、妖艶なる女優多摩子を中心として色彩豊たけき現代を背景に描ける曲折無限の作品也。

本能中心主義なる苦き女の惨たる終局を……………

行刊閣光求京東

銀四料送・銀五廿價定
美極幀裝・判六三
入繪口・頁二十九百



悲劇文庫

忘れ子

□著者冠頼□

吁虚榮の人、黄金主義の人の惨たる一生涯を見ずや？

十八年前茶店の床几に置き去りにされた滋子は茶店の娘として幸福に育たが兒を捨て子爵夫人となりし母は後悔懊惱に年月を送て果ては破鏡の悲哀に逢ふ、武士氣質の生父は切腹……………煩悶の高潮、遂に生を振り捨てんとせば……………吁幸か不幸か昔の戀人に救けられ、死の人となるを得ず。吁不可抗なるは運命也。

輕薄なる現代人に對する絶大のヒントを……………

行刊閣光求京東

銀四料送・銀五廿價定
美極幀裝・判六三
入繪口・頁二十九百



悲劇文庫

母と娘

□ 著者冠頰 □

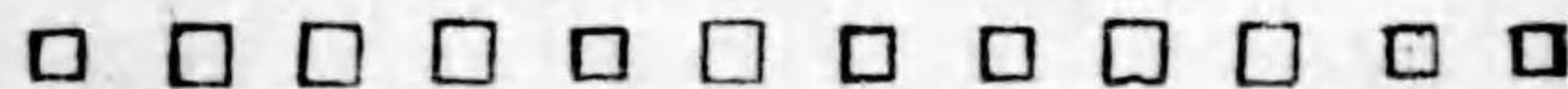
吁人類は悲哀そのものを味わんが爲めに生れ来るものに非らざるか？

親一人子一人の母と娘、母は生得多淫にして日夜情人と
共に淫酒に耽り、妙齡艶美なる娘は孝貞にして亡き父を
慕ふ、兩極端なる生を辿る母と娘、遂に娘は強制的野合
を強られ決然家を捨て母を捨つる織身少女の憐然む可き
運命、讀者は如何に共鳴し紅涙潜々として紙面に印せざ
るを得んや。

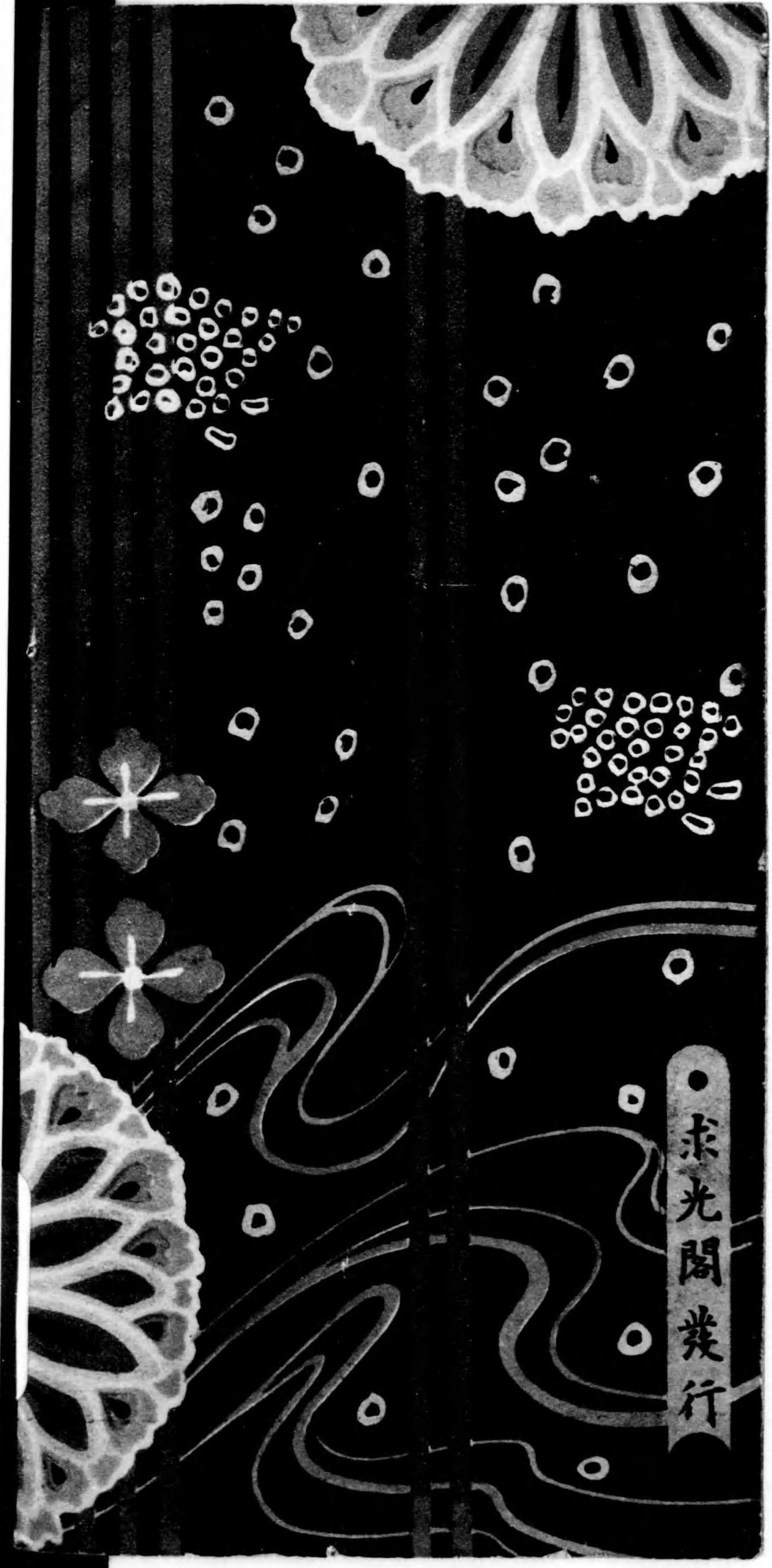
幸福なる生を亨く可き美はしの小女、多淫なる母に一生
虐き生となさしめらる.....

東京求光閣刊行

定價五錢・送料四錢
三六判・裝訂種
百九十二頁・繪入



終



● 求光閣發行